The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 発表を終えて |
| Author(s) | |
| Citation | 臨床哲学のメチエ. 1998, 1, p. 25-27 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/11361 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 発表を終えて.....

## 振り返って思うこと
## ――言葉にしてみて――

栗田　隆子

自分のことを、自分の登校拒否（不登校)のことをこんなにたくさんの人の前で話したのは初めてでした。何かとても大きな仕事をしたあとのような、脱力感が残りました。

言葉にして話すことによって「私」の不登校が共通の理解の上での不登校となり、そこから「不登校」という事例となって私の思いも寄らない方向に歩み始めるということ、それは私にとってやはりとても怖いことです。一般的な「不登校」という枠で括られたくはないということは、研究会の中でも述べました。人前で話すことで、何らかの「区切り」を付けるつもりでいたのですが、話し終えた今、「区切り」というより、話した後だからこそ見える「課題」がそれこそ壁のようにぬっと私の前に現れてきました。

私はいま「登校拒否」をしているわけではない。だけど、「登校拒否」からかいま見えた現実のあり方から無関係であるはずもなく、その現実のあり方を「この、今いる場所」から -- 私の場所とは、社会的な位置からみると、大学生であること、二十歳をすぎた「大人」であること、または「女性」であること、日本の国籍を持った人間であること、等々なのですが -- 見つめていくこと、そして「今の、この場での」感受性でしか表現し、記述できないことを意識し、その自分の限界をつねに感じ続けることが、「登校拒否」について考えることに、それはいわゆる、学校問題、社会問題としての「登校拒否」についてだけでなく、子どもの立場や、その感受性から生まれる「登校拒否」について考えることに繋がることができると思うのです。今だからこそ私は「学ぶ」とは何か「知ること」とは何か、さらに「学校」とは何か、を考えたく思っています。でもあのころの私はそのようなことは、どうでもよく、そのような子どもの立場からの「不登校」を伝えたいと思って話をしたつもりです。「大人」がつくりだした社会とそれについての子どもの感受性や苦しみとの関係をを記述していくのはたやすいことではありません。子どもの感受性、というものを大人が描こうとするならばそれは傲慢なことでしょう。子どもの感受性、というものに近づけないのなら、自らの感受性や、苦しみを表出する大人の言葉というものが必要で、それは子どもとの違い、理解し得ないかも知れないという限界を感じつつ、しかし編み出す必要のある言葉なのではないでしょうか。

今の私が話す＜「登校拒否」をした私＞はその時苦しんだ私のありかたを正確にあらわしているとは言いがたいでしょう。けれども、それを承知で語りたい「私」が存在し、あたかも大人と子どもの越境状態にあるその「私」に突き動かされるように話しをさせてもらいました。

私の話したことに、様々な感想を持たれたことと思います。その感想をきかせてもらえたら嬉しいです。そこから新たな「課題」を眺めながら言葉を紡ぎだしていけたらと思っています。

--「大学卒業厳しく」2000年春入学から --
大学審議会の答申が提出された日、そして38年ぶり横浜ベイスターズ優勝の日に

＊＊＊

## 報告を通して

畑　英理

「息子の不登校」をこんなに大勢の前で語るのは、初めての体験でした。このことが、彼や私たち家族にとって「タブー」であったり、「世間に後ろめたいこと」であったりしたことは一度もないのですが、それでもあくまでプライベー

トなことには変わりなく、その「私的」なことを敢えて語るには、いままでなかった動機が必要でした。それは、この研究会に関わった人みんなの、「臨床的に」哲学を考えようという熱意であり、「不登校」を自分の存在証明と深く関わらせて対象化したいという意欲を持った若い友人たちとの出会いでした。

研究会のなかで同時に報告するパネリストが「本人」「教師」という立場であり、私が「親」という立場で報告するという視点を与えられたことで、この研究会で報告することの「私性」がとてもはっきりしたように思います。

「息子の不登校」を語るとき、私はあくまでも、「彼の親である私」に拘わろうと思いました。「本人」がそのもっとも苦しい場所にもう一度立ち戻って、そこから見えるものを報告してくれる。「教師」が、少し広がりのある視点で、だからこそ内包する一種の「危うさ」を恐れず語ってくれる。その信頼のうえに、私はあくまで「親」として語り、息子に接することで、矛盾に満ちた自分の存在のしかたを知ったことを報告したいと思いました。

けれど「私」に徹する作業をとおして、いままで人に語ることもあった「彼の不登校」は、実は私自身が知らずに彼に「侵入」していて、私でも彼でもないものを語ることがあったように思えてきました。あるいは私にとっては、彼が私を「侵食」していたのかも知れず、親子のように「逃げ場のない」関係の場合、そのような混乱から、この問題がいっそう深くこじれたものになっていく可能性があることを、改めて知らされました。

当日は、「不登校という現象」をとおして、何か共有できるものが見えてくるか、あるいは「不登校」そのものが何か別の見え方をするか、特に、現実にいま「不登校」のことで苦しんでいる方にも何かひとつでも「発見」できるような場になればいいのだけれど、という過剰な期待もありましたが、そのことについては結論は求めず、これからの研究会の積み重ねに期待したいと思います。

私自身にとっては、報告することで改めてわかったことは大きく、会場からの意見や質問が多かったことで、この問題に多くの人が関心を寄せていることを痛感しました。回収したアンケートに、「学校に行っている子供も、自身の価値基準などは持っていないのではないか」というご意見がありましたが、確かに初めからそんなものを持っている子供はいないのです。子供が社会化していく過程で、与えられた「価値」を内面化していくわけで、「不登校」の子供たちはその途中で「待った」をかけているのだと思うのです。

質問や意見に十分な時間をとって議論を深めることができなかったのは残念でしたが、その発言をとおして、それぞれの方の使う言葉が、同じ言葉でありながら、みんな少しづつ意味が違うことを知りました。そのことが、その言葉を使う人自身の立場を、考え方を、とてもよく表わしていると思います。「私性」に拘わりながらも学問として「普遍的なもの」を求める以上、この差異をむしろ手がかりとして、これからのこの研究会の道程に臨みたいと思います。

一般的な「不登校問題」を考えるのではなく、「私にとっての不登校」あるいは「私の不登校」として考える素材を提供したつもりですが、その試みがどのような結果をもたらすかは、残念ながら今の私の位置から見ることはできません。ひとりひとりが、全ての問題の「自分にとっての意味」の当事者であることを確認できたことを私の喜びとし、この場を共にしてくださった全ての方に感謝します。

980717

## 参加者からの声より

私は、「不登校のこどもを持つ親」となって５年である。栗田さんが「学校は所与のものとしてあって、＜子供＞の立場からは、問いをだすことはできない」と言われていたのが印象的だった。

私も自分の子供にたいして、最初は「なぜ行かないの？」と尋ねたりして追いつめるようなことをしてしまったという反省がある。それと同時に、親も自分の子供が不登校した瞬間から、学校や周りのひとたちから、いろいろと（家での様子や、生育歴など）聞かれたりアドバイス

されたりと、なぜか“問われる”立場になってしまった。どうして子供が学校に行かないという、一点だけのことで、問う立場（指導する）―問われる（指導される）という関係になってしまうのか？

学校に行っている人の人数が今のところ圧倒的に多く、行っていない者が少数派というだけで、行かないことが異常とされてしまう。不登校は、べつに道徳的、倫理的に悪であるわけではないが、今は何となくそのように思いこまされてしまうようなところがあって、それが親子ともに、特に（大人に比べて弱い立場の）子供にプレッシャーを与え、苦しいところに追いやっている気がする。そういう見方を変えることだけでも、今の不登校の子供たちのしんどさは大きく減少すると思う。そうすれば、子供の方から「なぜ学校にいかねばならないのか？」「勉強する意味は？」とか「こうしてほしい」といえるエネルギーが出てくると思う。その後のことは、子供自身が「じゃあこれからどうする」と考えることができると思う。子供にはそれを考える力があると、私は信じている。

学校の力が強くなっているのかどうかという話については、強いとも弱いともどちらでもいえるような気がするが、ただ学校はもちろん、家庭、地域など社会生活が学校化しているとは思う。親も子供を成績（というより学校生活への適応のうまさ？）で評価する。こどもはどこにも逃げ場がない。遊びでさえも評価される。（例えば休み時間であっても、一人でポツンとしていては、“友達のいない子”と評価されてしまう。）自分でありさえすればそれだけで認めてもらえる場所が誰にでも必要なのではないだろうか？

そういう意味では、今後も、不登校や不登校のこどもそれ自体を論じるのではなく、不登校を通じて見えてくるものは何かを考えていってほしいと思う。（小池啓子）

## セクシュアリティに臨む哲学
### ――セクシュアリティ研究会への誘惑

本間直樹

**セクシュアリティ（性愛）についての言説はいたるところに蔓延している。私生活についてのお喋り、各種マスメディアにて提供される情報、そして「最新の」科学の知見まで。しかしその一方で、このような情報の洪水のなかで、セクシュアリティについて語ることの困難さはますます深刻になってきてはいまいか。セクシュアリティを語る場はどこにでもあり、どこにもない。**

**セクシュアリティ、それは、人前で話題にすることが憚れるようなごく私秘的な事柄でありながら、同時にすべての人たちにとって免れ得ない普遍的な問題、つまりフーコーのいう意味で、「個別かつ普遍的」な問題となっている。**

**もっともセクシュアリティの問題は、何もそれが純粋に「主観的な体験」として個別的であり、同時に「科学的真理」として普遍的であるわけではない。セクシュアリティの客観化はセクシュアリティを語る主体を隠れた仕方で特権化することであり、逆にセクシュアリティの主観化は語る主体を矮小化することである。**

**主観的なものであれ、客観的なものであれ、セクシュアリティについての“純粋な記述”はあり得ないのではないか。むしろセクシュアリティについて語ることによって、「語る主体」なるものが常に逆照射されるのであり、そこにこそセクシュアリティについての語りにくさが起因するのだ。**

**語られた体験の数だけのセクシュアリティがあり、そこから臨床哲学の問いは始まる。例えば、「同性愛」。私たちは「同性愛」と「異性愛」という区別をあたかも自明なものとして扱い、自分をその区別の一方に位置づけようとする。しかし私たちのひとりひとりのセクシュアリティとはこのようなカテゴリーの自明性のなかに安住し得るのだろうか。私たちの「研究会」は差し当たり、日常・非日常に溢れる様々な素材（マンガ・小説・映画）を用いて「セクシュアリティ」との付き合い方を模索する。そして出来れば、毎回この『メチエ』を通じて個々の成果を発表していきたい。（ほんまなおき　助手）**